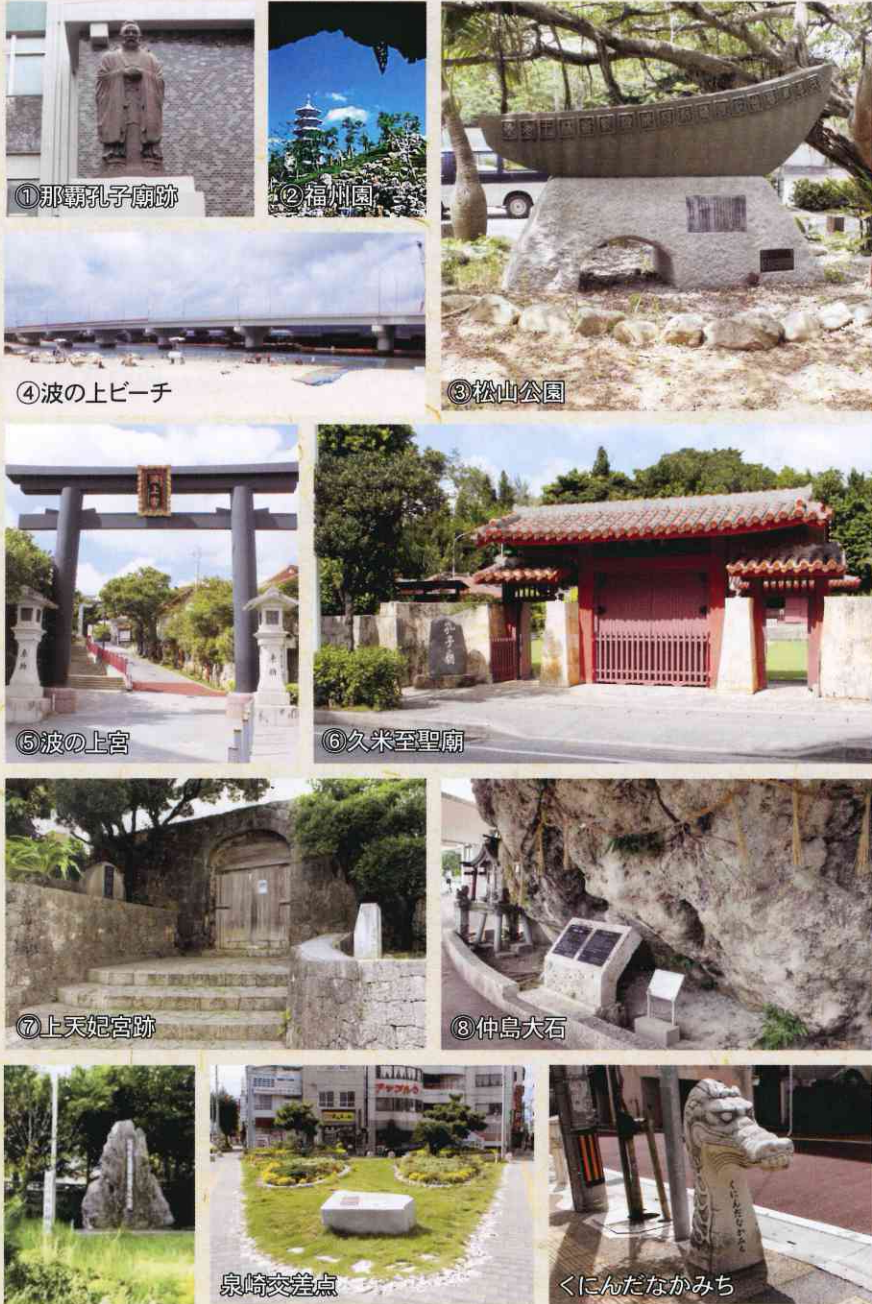


うたな-フットパスdeパークスポット久米村巡り



「フットパス」とは、イギリスを発祥とする“森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと「Foot」ができる小径(こみち)「Path」のこと。

那覇市内でも、「歴史・文化・自然」と魅力ある観光地、まだまだ知られていないスポットが残っている。那覇市内近郊を、思う存分散策を楽しみながら、パワースポットを探そう。

かりゆし琉球ホテル近郊の那覇久米「久米村(くにんだ)」をご紹介します。

所要時間：徒歩 約 2 時間 自転車 約 70~80 分

かりゆし琉球ホテル

① 那覇孔子廟跡

② 福州園

③ 松山公園

④ 波の上ビーチ

⑤ 波の上宮

⑥ 久米至聖廟

⑦ 上天妃宮跡

⑧ 仲島大石

かりゆし琉球ホテル

沖縄戦で、街並み家並みが壊滅したばかりではなく、戦後の都市開発により道路の形状・地形まですっかり変わり果てた久米村。今では唐人集落だった昔のおもかげをうかがうことはできないが、琉球の歴史・文化とゆかりの深い史跡を巡り、かつての繁栄に思いをはせながら周囲をそぞろある歩けば、趣深い散策が楽しめる。

【久米村】

中国明朝時代に、福建省閩地方の人々『閩人三十六姓』が渡来、久米村(現在的那覇市久米)に寄留したのが発祥とされる。琉球王府の中継貿易における造船技術・航海術、通訳などの役割を担い、さらに、風水師としても琉球王国の国策に大きく寄与していた。

【久米村の街づくり】

久米村は、風水に則り、中央を貫く大門通りを龍身に見立てて村が形成されていた。《龍の頭にあたる久米大門(現在の泉崎交差点付近)、胴体にあたる久米大道、龍の尾にあたる西門(西武門)、龍珠にあたる仲島の大石(現在的那覇バスターミナル内)》。この龍脈こそが久米のパワースポット。地図を片手に歩きながら、地下で横たわる龍を想像してみてもいいだろうか。

沖縄かりゆし琉球ホテル・ナハ

OKINAWA
RYUKYU HOTEL NAHA
KARIYUSHI

〒900-0021 沖縄県那覇市泉崎 1-11-5
TEL: 098-866-0786 FAX: 098-862-2964

泉崎交差点

くにんだなかみち

【散策コース紹介】



①那覇孔子廟跡 中国の聖人孔子を祀る至聖廟は戦前までこの一帯にあった。現在は蒋介石から贈られた孔子像が立っている。

②福州園 1992年(平成4年)に那覇市と福州市の友好都市10周年を記念して開園した中国式の庭園。実際に福州から取り寄せた材料と職人の手になるもので、小さいながら本場の迫力が楽しめる。

③松山公園 エイサーの始祖、^{たいちゆうしやうじん}『袋中上人』の碑が立つ。袋中上人は浄土宗を広める為、ここに桂林寺を建てた。『閩人三十六姓』の碑も立つ。

自然崇拜が根強い琉球に、「誰でも特別な修行なしに、ただ念仏をひたすらに唱えることによって救われる」という教えを説き、従来の難解な仏教に比べて上人の教えは簡易に表現されたため、庶民にまで広がった。また、上人が踊った故郷福島の『じゃんがら念仏踊り』を元に、琉球の人々によって三線と琉球独特の音楽がのせられた。これが、現在のエイサーの始まりだとされている。

⑤波の上宮 琉球王府の行事にも正式に位置づけられた伝統ある神宮。冊封使が琉球滞在中、書を残すほどの景勝地

⑥久米至聖廟 元々は泉崎の今の孔子像がある場所にあった。沖縄戦で大成殿、明倫堂などの建物や聖像、蔵書が灰燼に帰し、敷地も戦後、旧軍道1号線(現国道58号線)が貫通して僅かに残るのみで跡地での廟再建が不可能となった。那覇市若狭に廟地を選定して復興工事に着手。1975年(昭和50年)1月に至聖廟落成式と第1回の釋奠(せきてん・孔子を祀る儀式)を行った。「明倫堂」は沖縄の公立学校の始まりと言われている学問所である。

⑦上天妃宮跡 航海安全の守護神である天妃を祀る廟の跡。天妃とは中国沿岸部や東南アジアで航海者に信仰されている媽祖(まそ)の称号。「上の天妃宮」の石門は天妃小学校内に残っている。文化財の指定。

⑧仲島の大石 明治以降埋め立てられ、現在はバスターミナルになっているが、王府時代は大石まで海岸線だった。付近には仲島遊郭があり、遊人たちで賑わった。大石は古来よりニライ神の降りる所として祀られ、岩はアマミキシと称された。沖縄県の天然記念物に指定。

神名
タチガン(立ち神)であるが、岩はアマミキシと称された。

由緒
『沖縄民俗文化論』湧上元雄著から。

人骨も納めた立て岩の拝所。『琉球国由来記』第八にも、「此大瀬ヲ、一名ニ、アマミキシト云、石ヲ崇シ所ト見ヘタリ。久米村ノ風水ノ石トモ云説あり」とある。

唐宮(久米村)宰一の風水の石ともされ、「文筆峰」とも呼ばれ、竜珠(竜が手に握っている宝玉)に見立てた。本来は太古以来の立て石の「アマミキシ」であった。キシは高峯の頂点の意で、キシ、キストとも転訛する。この地は那覇泊の漫湖の内海の汀線にあり、ニルヤセジの憑依するウフシは遠古の漁労祭祀の遺跡であったのである。